

鹿児島県肝属地区における和子牛の供給構造

久保田哲史（九州農業試験場）

Tetsufumi KUBOTA : Supply Analysis of Japanese Black Calves in Kimotsuki district

1. はじめに

本報告では、和子牛の供給構造の解明を課題として、鹿児島県肝属地区を対象に、和子牛の供給頭数と、価格や生産主体の存在状況との関連について分析を行った。1976年度から、'92年度の17年間を分析期間とし、分析には主として家畜市場データを用いた。

なお、分析に用いた家畜市場データは、1987年9月までは鹿屋市場のデータであり、それ以降は、鹿屋市場が根占市場及び佐多市場と合併し肝属市場となったため、肝属市場のデータである。

2. 和子牛の供給量変動と価格変動

まず、和子牛価格とそれに対応する和子牛取引頭数との推移を第1図に示し、両者の変動の方向を検討した。

和子牛価格は年度平均価格を用いた。価格に対する取引頭数のタイムラグは19か月（受精～出産10か月＋出産～出荷9か月＝19か月）と25か月（子牛～初受精期6か月＋19か月）を想定し、その2つを総合的に用いた。

第1図の80～81年度、85～87年度、89～90年度において価格変動に対する供給量変動の逆行現象がみられる。この中で特に問題なのは85～87年度の価格上昇に対する供給量減少である。この部分の和子牛供給量の変動は、和子牛価格変動の直接的影響のみでは説明できない。

3. 親牛（子取り用雌牛）飼養農家戸数の動き

供給量の変動要因として、生産主体である親牛飼養農家（以下、農家）戸数に着目し、時系列的な推移を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

第1に農家の総数は年々減少している。第2に親牛飼養頭数1頭、2頭、3～4頭の規模が小さい農家が多数存在している。そして、鹿屋市場時代には規模1頭、2頭の農家が傾向的に減少しており、肝属市場時代になる

と、さらに規模3～4頭の農家まで減少傾向を示すようになる。これらのことから供給量変動の逆行現象について次のことが推察される。

すなわち、供給量変動の逆行現象がみられた肝属市場時代の85～87年度においては、農家戸数の減少傾向が1、2頭規模から3～4頭規模まで進展しており、このことが年々の供給曲線を左方へシフトさせ、価格上昇にもかかわらず市場全体の供給量を低下させたと考えられる。

そこで、肝属市場時代の供給量から、減少傾向を示す小規模階層の供給量を除いて、規模5頭以上の大規模農家階層のみの供給量変動を推定し、第2図に示す。なお、データの制約上85～87、90年度の4年度について示す。

第2図では、第1図でみられた逆行現象が比較的修正されている。

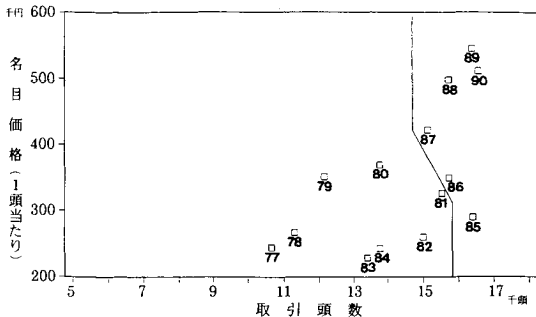
4. おわりに

これまでの分析から、和子牛の供給について次の点が指摘できた。和子牛の供給は、多数の小規模農家による供給と、少数の大規模農家による供給とで構成されている。そして、小規模農家は傾向的にその戸数を減少させている。これは和子牛の年々の供給曲線の左方へのシフト圧力となり、このシフト圧力の大きいかんによっては、供給曲線が左方へシフトし、第1図に示したように、和子牛価格が上昇しても、市場全体としては和子牛供給量が減少するという供給量の逆行現象が起きる。

先述したとおり、近年、傾向的減少を示す飼養農家の規模が、より大きな規模階層へと拡大している。この傾向が続けば、和子牛の供給は、今後価格の上昇期をむかえても全体として縮小していく可能性がある。

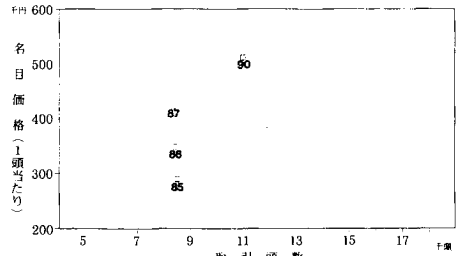
参考文献

- 1) 鹿児島県農政部『かごしの畜産』1993.



第1図 和子牛取引状況 I

資料) 農林水産省統計情報部「食肉流通統計年報」及び「同月報」
注) a) 図中の数字は価格についての年度を示す。
b) 取引頭数はタイムラグを考慮した数値である。たとえば、77年度価格は1979年11月から1980年10月までの取引頭数に対応している。



第2図 和子牛取引状況 II

資料) a) 農林水産省統計情報部「食肉流通統計年報」及び「同月報」
b) 九州農政局鹿児島統計情報事務所「市町村別統計書Ⅲ」
注) a) 図中の数字は価格についての年度を示す。
b) 取引頭数はタイムラグを考慮した数値である。
c) 取引頭数は親牛頭数全体に占める5頭以上規模農家の親牛頭数シェアから推定した。なお、その際規模3～4頭階層の親牛頭数はデータ制約上、3頭と仮定して算出した。
d) データの制約上、85、86、87、90年度の4年度について図示した。